

# Concert Reviews

田崎悦子 P

06年10月からスタート、足掛け2年半にわたり取り組んできた「田崎悦子ピアノ大全集」シリーズも完結となる。半生をかけて蓄積してきたバツハから21世紀までのピアノ音楽の縦断。これからの田崎の方向性とさらなる広がりへの予感をも感じさせた。最終回第6夜のテーマは「20世紀から21世紀へ」。グローバル化の時代、音楽的に平均化されボーダーレスとなった感であるが、海外経験豊かな彼女ならではの視点で欧米の作品のみならず邦人作品も見据えている。まずは、メシアン（幼児イエスに注ぐ20のまなざし）第11曲。冒頭、神の主題に伴う急速な下降音型とその後の対比、そこに第6夜の全てが

凝縮されていたといっても過言ではないだろう。まさに聴き手を忽然と引きずり込む田崎の気迫と凄み。彼女の演奏家としての充実の証しを垣間見た。自身が初演したロックバージョン「バルティータ・ヴァリエーションズ」では、心底、曲に惚れ込む全身全霊の演奏であり、そして後半、

池辺晋一郎（J・Sの声のほうへ）へと進め、20世紀、21世紀のバツハから、最後、このシリーズの最初に取り上げたバツハ「バルティータ第4番」への構成は実に絶妙で、田崎のピアノニズムは内的精神性を極めシリーズの円環を閉じた。5月22日、東京文化会館（小）

●高山直也